

よ人

手づくりの小型ヨットで単身世界一周航海の快挙を果たしてから十年。日本人として初めて恐怖のホーン岬を越えた男のその後の人生は、平たんなものではなかった。

三年がかりの大航海から帰国しての第一声は「またできるだけ早く航海に出たい」。その衝動に従って「南太平洋の楽園」への航海も計画したが、経済的な問題、失恋、これまでの人生への懐疑など、様々な悩みを抱え、内面のかたどうを経る中で冒険への夢は薄れた。

とはいえ、ヨットは高校時代以来の最高の伴侶(りよ)。

信天翁二世から10年



青木 洋さん

カメラの製作に乗り出した

一般の自然保護論者と話していると、どこがおかしいなと感じます。海に親しむ体験がものすごく少ないから「陸(おか)の発想」に傾いている。例えば、淀川の浄化を訴えるとなれば、私なら淀川にカヌーを浮かべてみんなで遊んでもらう。そこで川の水を手につくって、どれだけ汚れているかを判断してもらおう。カヌーで遊びまわる人が増えたら、おのずから浄化を求める声が高まると思います。

ヨットマンのたまり場に。

「私にとって、アドベンチャーは終わった。今はオカでやりたいことがたくさんあるので、ヨットの遠洋航海はおじいさんになるまでしないつもり」と言うが、大航海に出かけようとするヨット仲間への支援は惜しま

十二才、値段は十七万七千円―二十三万八千円。川下り、湖の周遊、海辺の「散歩」なども楽しめる新しい野外スポーツの一般への普及を目指す。「カヌー遊びを通して、人間が持っている野性をよみがえらせて欲しい」というのが、本人の希望。

ヨットでの生活は社会生活と全く違います。自分と自然がじかに対面する。そこからうな心境になります。普段の社会はカネが支配する世界。職場でも家庭でも、カネを通して交流しています。その点、海は仮面のない世界。自分の意識を変革する、壊れた自分を再構築する。海にはそんな力があるんです。

泉州のハーバーを拠点に年に数回のセーリングは欠かさない。

三年前、六年間勤めた堺市内のヨット販売会社を退職し、住之江区内の知人の土地を借りてヨット修理業を始めた。今春から旧大津港の海辺に移した事務所は、今では彼の人柄にひかれる

ない。海とヨットがどれだけ人生の多くを教えてくれるかを、体で実感しているからだ。

今秋からは新しい事業に手を染める。日本ではまだなじみの薄い「カナディアン・カヌー」の試作艇を作り、この十一月から販売予定。二人乗りで重さ

日本人というのは、江戸時代の鎖国以来、海で遊ぶという行為に対してきわめて敵しいと思うんです。ヨットの操縦が免許制になっているのも、世界中で日本だけ。この免許制は知識の習得という面でヨットマンの役に立っている、いちがいに廃止しろとは言いませんが、改善の余地はある。天気図の読み方、ロープのくくり方など、海の実態に即した学習に必要があると思います。

私生活も一大転機を迎える。数年前から始めた座禅や茶道の会で知り合った一歳年上の高校教師と今月末にゴールイン、住居も彼女が住む和歌山市に移す。大海を一人できまよってきたかに見える男はいまやっとな人生という海に二人で帆を上げる。

◆プロフィール◆ 昭和24年4月、大阪市生まれ。桃山学院高校に進学したころからヨットに興味を持ち始め、昭和46年6月から手づくりの小型ヨット「信天翁(あほうどり)二世」で3年がかりで世界一周航海。今春から泉大津市東港町でヨット修理業、青木ヨット工房を経営。